

## とよぶらり

米子高専図書館情報センター報

ISSN 1344-5634

第 82 号

平成 19 年 1 月 31 日発行  
米子工業高等専門学校  
図書館情報センター

## 平成18年(第33回) 校内読書・エッセイコンクール優秀作品発表

## 〈読書感想文の部〉

最優秀賞	建築学科3年	山本 麻実	「雪とパイナップル」から学んだこと
優 秀 賞	機械工学科5年	吉次 峻平	「猫の事務所」を読んで
〃	物質工学科5年	松原 祥子	「あめなる花をほしと云いこの世の星を花という」 ～ひのきとひなげし～
佳 作	電気情報工学科1年	岡本 俊樹	「僕の生きる道」を読んで
〃	物質工学科1年	上小谷 瞳	「ホスピス通りの四季」を読んで
〃	物質工学科1年	間瀬 一馬	「ありがとうは祈りの言葉」
〃	建築学科1年	香川恵理子	「自殺って言えなかった。」
〃	建築学科1年	山本 桃璃	「イツモ。イツマデモ。」

## 〈エッセイの部〉

最優秀賞	電子制御工学科1年	伊藤 夏織	私と筆
優 秀 賞	電気情報工学科1年	造田 美咲	その周りを
〃	電子制御工学科1年	関本 美咲	理想のレシピ～勉強編～
佳 作	物質工学科1年	福田 真菜	『「障害者」と街で出会ったら』
〃	建築学科1年	住友 美香	一人の大切さ
〃	建築学科1年	萩原 由也	尊敬

## 読 書 感 想 文 の 部

## 最優秀賞

「雪とパイナップル」から  
学んだこと

建築学科3年 山本 麻実

命って何？

「生きる」ってどういうこと？

この「雪とパイナップル」という本を読んで、私は深く感銘を受けた。命の尊さと大切さを感じずにはいられなかったからだ。

私はこの春、大切な友人を交通事故で失った。そのことをきっかけに、「命の大切さ」について

深く考えるようになってはいたのだが、この本を読んで、さらにたくさんの事を考えさせられた。

人ってなんてちっぽけな存在なんだろう。人間一人の命の重みなんて、大きな地球から考えてみれば、ほんの虫ケラぐらいでしかない。本の中で、チェルノブイリで起こった原発被害だって、ほとんどの者は知らなかったり、知らされていなかった。黒い雨の正体さえも、そこで暮らしている人々には知らされていなかったのだ。

実際、私の身近での出来事を考えても、そのことは感じられる。私の友人が交通事故にあった場所は、私の家からほど近いため、よく通る機会がある。私は、その場所を目にするたびに、その友人のことを思い出し、心が痛む。しかし、何も聞かされていない人々にとって、その場所は何の変哲もない場所であり、ガードレールが不自然に曲がっている理由なんて、気に掛ける人はいないのだろう。身近な例を挙げて考えると、悲しく寂し

い気持ちになる。

しかし、私自身も他人の事になると、そんなに気に掛けてはいないものだ。例えば、今、レバノンでは戦争によって、関係のない多くの人々が犠牲になっていると聞く。これは、尊い命が大量に失われているという重大な事であるのだが、遠い世界で起こっていることで、自分には関係のないことだと思いがちである。私達若い世代が、もっともっと世界に目を向け、戦争のない平和な世の中を築きたいものだ。

そしてもう一つ、この悲しくて、切なくて、美しい話から私が考えたこと。それは、私達が生きていく上で重要な、「幸せとは何か」ということだ。「幸せ」とは、辞書によれば、「悲しみや不安がなく、精神的にも物質的にも、満ち足りている状態」のことだそう。そう考えると、幸せを感じることは何だか難しそう、自分とは遠いものといった印象を受ける。しかし、私はこの話を通して、幸せとは案外身近なものであるということに気づかされた。私達の毎日には、細やかな幸せを感じる瞬間がたくさんあるのである。例えば、人から挨拶をされること、笑顔になれる瞬間があること、自分を心配してくれる人がいること、そして、そういった人と人との繋がりが存在すること……。毎日生きていく中で、そういった事が当たり前になり、その幸せの価値は忘れられがちになってしまっている。そんな小さな幸せの価値に気づき、感謝するようになることは、とても大切なことだと思う。

最近の社会では、人間の温かい心が忘れられているのか、悲しい話題をたくさん耳にする。学校でのイジメは当たり前のようになり、子供の誘拐が増え、殺人事件の話題もよく耳にするようになった。現代社会は、非常に恐ろしい世の中だと思う。人々は、温かい心を一体どこに忘れてきてしまったのだろうか。本来、人間は他人を幸せにすることの出来る「温かさ」を皆持っていると思はれる。そのことを皆が思い出して、温かい社会になることを私は望んでいる。この本に教えられた、この温かい気持ちを忘れずに、今後、人々の幸せについて、もっと考えていければ良いと思う。

優秀賞

## 「猫の事務所」を読んで

機械工学科5年 吉次 峻平

宮沢賢治の短編に、「猫」という作品があります。

賢治はそのなかで、「私は猫は大嫌ひです。」「どう考へても私は猫は厭ですよ。」と言っています。そんな猫嫌いの賢治が、あえて猫を主役にしたこの作品には強いメッセージがあるような気がして、「猫の事務所」を読みました。

話自体は、賢治の他の著名な作品に比べて短く、内容もわかりやすく簡潔でした。

猫の事務所が解散を命じられるまでのいきさつを、細かいエピソードを添えて書いたもので、事務長の黒猫、一番書記の白ねこ、二番書記の虎ねこ、三番書記の三毛ねこ、四番書記のかまねこ、そして「ぼく」が登場します。かまねこというのは、夏に生まれた夏猫で、生まれつき皮膚が薄いために、冷え込む夜はいつもかまどの中にはいつて寝るので、いつでも体が墨で汚く、他の猫から嫌われている猫です。かまねこは、なにか悪いことをしたわけではないのに、みんなからいつもいじめられています。「ぼく」は一生懸命みんなに好かれようとする善意のかまねこに大変同情しています。語り部である「ぼく」というのは賢治のことで、かまねこは賢治の分身ではないのかと、僕は思います。

こんな箇所がありました。

『ある日かまねこは運悪くかぜをひいて、足の付け根を腕のようにはらし、どうしても歩けませんでしたから、とうとう一日休んでしまいました。』この『足の付け根を腕のようにはらし、』というのがとてもリアルに感じ、もしかして賢治が実際に足の付け根をはらしたことがあるのでは、と思いました。やはりかまねこは賢治の分身であるように思えてなりません。

また、読んでいくうちに、なぜ賢治が猫を用いてこの作品を書いたのか、だんだんわかってきました。かまねこの他のねこはほんとうに嫌なやつばかりで、頭も悪く、嫌いなねこを採用したのもわかります。また、僕は、この話は猫の世界の話ではなく、僕たちの世界で現実にある人間の醜さに対する賢治の嘆きである、と捉えました。そうだとすれば、登場人物を人間ではなく猫にして具体的な人物説明を省き、人物像を限定しないことで、たくさんの人に、より身近な出来事と重ね合わせ考えてもらうことを、賢治は期待していたのではないのでしょうか。

僕はこのねこたちのような人間をよく見ます。自分よりも弱いものを虐げ、「自分はこいつよりも優れている。」と思うことで自己を確立する人はたくさんいます。自分もそういうところがあるので、かまねこより他のねこたちのほうへ強く感情移入しました。この作品を読みながら、かまね

このことを不憫に思い、他の猫たちに怒りを覚えると同時に、自分にもある醜い部分に気づき、僕も三毛ねこと同じじゃないかと思いました。そして最後の獅子が現れるシーンでは、僕も獅子に叱られたような気分になりました。権力者である獅子は窓の外からかまねこがいじめられているのを見て、いきなり戸口をたたいて事務所に入ってきました。ねこたちは獅子を前にして、おろおろうろたえるばかりでした。それはやはり、心の中では、自分はとても愚かなことをしているというのをわかっていたからなのでしょう。しかし、自分より権力のある者があらわれ、自分に多大な被害が及ぶような状況にならないとそれを悔い改められないというのが、卑怯だと思います。そのなかでかまねこだけが、泣くのをやめて、まっすぐに立ちました。うしろめたいことが何ひとつ無いことで、権力者の前でも堂々としていられるのでしょう。この場面から、誠実に生きることの大切さと、人を虐げ自分だけの利益を求めるケチくさい生き方の愚かさを、読者に訴えたかったのではないのでしょうか。

そして、最後の獅子のセリフ、『おまえたちは何をしているか。そんなことで地理も歴史もいった話ではない。やめてしまえ。えい。解散を命ずる。』こうして事務所を解散させてしまった獅子に、『ぼく』は半分同感しています。この『半分』というのが初めはピンときませんでした。何も解散までさせることは無かった、ということなのか、怒りに任せて強引な決断をしてしまった獅子にもう少し冷静にことを解決して欲しかった、ということなのか、とにかく、獅子が完全な正義ではなかったということを表しているのではないかと思います。獅子も含めて、現代の人間の世界における自分中心で利己主義な生き方への風刺だと思いました。

この作品は、現代の人間社会でも十分ありうる身近で細かいエピソードと、猫という抽象的なモデルを中心に書かれていることで、頭のなかでいろいろな想像ができ、賢治がこの作品に託したメッセージについて、さまざまに膨らませて空想することができました。賢治がこの作品を発表したのは、1926年ですが、そのころから人間はあまり変わっていないのだと思いました。要領よく楽をして生きる人間や、不器用で要領が悪く、苦勞して生きる人間もいますが、それぞれが謙虚になり、自分の愚かな部分にまず気づくことが大切だと感じました。この物語で賢治が風刺したことは、人間の本質にあるもので、そう簡単に変えられるものではないと思います。事実、80年間変わっ

ていません。しかし、一人一人がそういう部分に気づくことで、その人のまわりだけでも少しずつ穏やかになっていくはずですよ。僕は白猫が自分に一番近いと思いました。現実で弱いひと一人ぼっちでいたとしても、まわりを気にして手を差し伸べることはできないと思いますし、自分より弱いものがあることでプライドを保とうとするでしょう。僕は今回この『猫の事務所』を通して、自分の愚かな部分に気づくことができました。今すぐに何かをすることはできないけれど、これらのことについて、これからも考えていくことのきっかけとなりました。最後に、一番印象に残った文章を紹介して終わります。

『かまねこだけが泣くのをやめて、まっすぐに立ちました。』

## 「あめなる花をほしと云いこの世の星を花という」～ひのきとひなげし～

物質工学科5年 松原 祥子

「いちど女王<sup>スグニ</sup>にしてくれたら、あたしは死んでもいいんだけど。」

小さな小さな「ひなげし」達は、強い風に髪もからだも揺られながら女王という地位に憧れていた。他人に憧れる・羨ましいという思いは誰もが日常的に感じることだろう。

人々は、  
「こうなりたい。」

という理想の自分を頭の中で思い描き、それに向けての努力をする。それは勉強であったり、容姿のことや性格であったりと、人の数だけ違う願いがあるが、どれも夢や目標である。ただ、それを心の底から正直に他人に伝えることには後ろめたさを感じてしまう。夢や目標のその根底は欲望の固まった姿であり、夢というきれいな花の下には他人には見せることのできない人間の卑しい部分が深く根を張っているからである。これこそが人間の本質なのではないだろうか。

ひなげし達は皆、ここらいったいの誰よりも美しくなることを望んだ。しかし、悪魔に騙されて、危うくけしの頭をみんな食べられてしまいそうになり、すんでのところひのきに助けられる。それなのに、ひなげし達は「それでもいいから美しくなれる方が良かった。」

と口々に言った。大きな幸せを得て輝く一瞬を選びたがった。

欲望は尽きることを知らない。生きていく限り更なる欲望が生まれてくるだろう。もしもひなげ

し達が美しさとひきかえに食べられてしまっていたら望みは本当の意味の完成を迎える。死んでしまったら、もう欲望が生まれてくることはないのだ。願いを全て叶えて華々しく散って逝くことはとても魅力的な生き方だ。しかし、ひなげし達は欲望に正直でありすぎるあまりに、自分にとって一番良い咲き方を忘れていないのか。

「ちゃんと定まった場所でめいめいの決まった光りようをなさるのがオールキャストな、ところがありがたいもんでスターになりたいと云っているおまえたちがそのままそっくりスターでな、おまけにオールスターキャストだということになってある。」

自分達が羨ましいと思っていたものは、はじめから自分達自身の姿であったのだ。特別に美しくなくても良い。自分に似合ったちょうど良い光り方をしているほうがとても自然体で、何者にも侵害されない強い光を放つことができるのではないか。私自身も理想を高く積み上げすぎて、自分の首をしめていたように思う。無理をして力量以上の光を放つのは何より自分が一番苦しいのだ。

「あめなる花をほしと云い

この世の星を花という。」

到底手が届かない高い高いところにあるものも、地面にはいつくばって毎日を懸命に生きているものも、自分にしかできない輝き方をしていればどんなに多くの星や花があろうとも一番のスターになることができるだろう。

私はこれまで人に合わせること、協調性が一番大事であると思ってきた。そしてその結果、「自分自身」というものを見失いかけていたのかもしれない。この『ひのきとひなげし』を読んで、星と花の詩を聴いて、また自分の個性を探してみようと思った。今、思い描く未来の夢を全て叶えようとは思わない。自分の手に似合った分だけの小さながんばりを集めていけば、いつか目標に届き、その上にもいくことができるだろう。

「この世の星を花という。」

空にはたくさんの星がある。その中から名前もつけられていない小さな星を探すことは、とても難しい。同じようにたくさんの人々の中から個人を探し出すことは困難である。だからこそ、自分だけの輝きを放っていくことが大切だ。無理をしてはいけない。似合う光で輝いていこうと思う。花であり星である誇りを持って。

## 佳作

### 「僕の生きる道」を読んで

電気情報工学科1年 岡本 俊樹

進学高校の生物教師である中村秀雄は、ある日医師から余命一年と宣告される。その一人の教師の残りの人生をつづった作品、それが「僕の生きる道」である。

「もし、自分が同じ状況におかれていたら？」と読んでふと思った。正直あまりピンとこないが、自分の命があと少ししかないと知れば、絶望感におそわれ、何もする気がおきなくなってしまうと思う。最初の中村先生は僕の考えと同じだった。

余命一年と知り、何もかもがばかばかしくなり、学校でも問題を起こし無断欠勤をするようになった秀雄。ついには自殺をはかろうと、崖から飛びおりたが、奇跡的に助かった。その晩、秀雄が母親にかけた電話が、秀雄の考えを、人生を大きく変えた。

「僕が生まれた時、どう思った？」

『うん。…やっと会えたね、って。それから…この子のためなら、自分の命は捨てられる。そう思ったかな。』

母親のその言葉で秀雄は残りの人生を有意義に生きることを決めた。

ここはいろいろな事に「すごい」と思い、印象に残った場面だった。まず一つにその一言で中村先生の人生をも変えてしまう母親の言葉。そして、その一言で有意義に生きようと決意した中村先生に「すごい」と思った。

作中に中村先生のこんな言葉がある。

「ありのままの気持を伝えよう。それが僕にとって今を生きるということだから」

ありのままを伝える事は、とても大切な事だが、なかなか難しい。相手に嫌われたり、何か問題がおこるのをおそれ、自分に嘘をついてしまう。今の自分もそうだと思う。しかし中村先生は余命一年と言われふっ切れたのか、ありのままの気持ちを伝えようと決心した。そのため、生徒の事で問題を起こしてしまう事もあったが、その強い気持ちに動かされ、良い方向へと周りの人達も変わっていく。難しいが、とても必要な事だと思った。

そしてもう一つ、こんな言葉もある。

「将来を考えて生きることも大切ですけど、その時その時も、しっかり生きてほしいんです。高校生である君たちが、今、歩いている道に、しっか

りと足跡をつけてほしいんです。」

この言葉に僕は確かにそうだと思った。将来を考へて生活するのもいい事だが、「一寸先は闇」というように、明日にも何かが起こる かもしれない。それなら将来の事で不安になったり、今を犠牲にするより、今を見つめて、今やりたいことをやって過ごす事が大切だ、と中村先生は言っている。僕も先の事で悩む事はあるが、そんな時にこそ、この言葉を思い出す事で少しは気が楽になるのかなと思った。

憧れのみどり先生との結婚、秀雄が提案したクラス全員での合唱コンクール出場、合唱と受験勉強の両立のために頑張る生徒達。余命一年と宣告されてからの秀雄はいい事ばかりではないが、幸せな日々を過ごした。

一度何かで「病気になった事は不運だけど不幸じゃない」という言葉を聞いた事がある。中村先生もまさにそうだと思った。余命一年と言われて、不幸だと思って何もしないでいたら気持ちまで暗くなってしまふ。幸せになって明るい気持ちで毎日を過ごした事で中村先生の運命は少しだけ変わったのかもしれないと思った。余命一年と宣告されてから、一年と二ヶ月。中村先生は生きた。これまでと変わらず、自分に正直に。

この本を読み終えて、中村先生から学んだ事がたくさんあった。「自分のありのままの気持ちを伝える事」「将来ばかりを見ず、今を大切に生きる事」。この二つは特に僕の心に残った。中村先生は余命一年と宣告されたのがきっかけで、こんな考え方や生き方ができたのだと思う。でも、まだ残りの人生が長い(と思う)僕にも、それを見習って生活する事はできると思った。「中村先生のような考え方、生き方ができる人になりたい。」と思った。

## 「ホスピス通りの四季」を読んで

物質工学科1年 上小谷 瞳

「ホスピス通りの四季」は、鳥取赤十字病院内科に勤務していた著者の徳永進さんが、日々の臨床の中での患者や家族たちとの交流を綴ったエッセイである。作中で、全五十五人の患者それぞれのことを、穏やかなまなざしで綴っている。患者は、十三歳の少女から八十九歳のおばあさんまで様々だ。物語の中には、いくつも考えさせられる内容のものがある。例えば、「キクさんはタイムトンネルをくぐって行く」という話だ。八十九歳の木谷キクさんは、三年前に胃癌とわかったが手

術をせず、抗癌剤と対症療法で様子を見ている。キクさんは、徳永さんに

「こうしとってもえらいですし、家の者にも迷惑ですし、はよういかせてつかんせえ。」

と言う。キクさんは舅さんと姑さん、さらに夫も見送り、次は自分が死ぬということを覚悟している。死を覚悟した人特有の無表情がキクさんの顔にある。徳永さんが楽しい思い出はないかと問うと、キクさんは、舅と姑が亡くなり、三人の子ども巣立ち、夫は底引き漁に出かけ、自分が何の気兼ねもなく一人で暮らした時代だと言う。そのころの話をしているとキクさんの無表情はだんだんと融けてゆく。話しおわると、キクさんは自分があとどのぐらいかたずね、桜のころだと聞くと、「そうですが、そんなに持ちますか。」

と言って無表情に戻ってゆく。はやく迎えが来るように頼む、待っていると。

この話を讀むと、やりばのない悲しみがこみ上げてくる。無表情なキクさんにも、無表情が融けたキクさんにも。無表情なのは、生きることにもう何も執着が無いからだ。家の者の迷惑になるだけだと言うキクさんは、何の感情も持たず、ただ死だけを望んでいたのだろう。無表情が融けたとき、キクさんが思い出した楽しかったことは、一人でいたときだった。あのころの生活が、何の気兼ねもなく一番だったと。別の話で、著者は「結局人は一人。それが人のほんとうの姿だろう。」と書いている。多くの死に向かいあう医師たちは、嫌でもそれを実感してしまうのかもしれない。しかし、徳永さんは、作中で「人は一人、ではないのかもしれないと思った」とも書いている。「死」という絶対的な力を前に、人は無力である。最近では医療技術が進み、長生きすることができるようになったが、やはりそれにも限界がある。徳永さんの言うように、人はほんとうは一人なのかもしれない。でもそれを認めてしまうと、人生は暗く悲しいだけだろう。だから人は寄りそって生きていくのではないだろうか。本来一人であるはずの人間が、誰かと生きるのは大変だ。その「誰か」がどんなに大切でも、やはり他人であるし、一人のほうが気楽だと考えるかもしれない。でも人は、誰かと生きていく。それが人間なのではないか、と私は思う。自分のことが分かるのは自分しかいないけれど、誰かと生きていきたくて、誰かを分かろうとする。誰かを想い、想われるから、「人は一人、ではないのかもしれない」と言えるのではないだろうか。「一人ではない」そう感じられることが、本当の幸せなのだ。

## 「ありがとうは祈りの言葉」

物質工学科1年 間瀬 一馬

僕は、柴田久美子さんの「ありがとうは祈りの言葉」という本を読みました。

この本は、僕の祖母から「この本は良い本だから。」と渡され、読みはじめました。初めは、生と死についての本ということで、話が重たそう、読むのが大変そう、という思いが強く、しばらく読まずにいました。長期の休みになり、時間もあるのでなんとなく軽い気持ちでこの本を読みはじめました。読み始めると、気付かされることや考えさせられること、僕はあまり感動することが多くないのですが、ふと涙が出るところもありました。

この本は、本をくれた祖母の故郷でもある隠岐の島の知夫里島にある看取りの家「なごみの里」での生活記録です。看取りの家「なごみの里」は、作者の柴田久美子さんが、本来病気を治すための病院で、もう治る見込みのない患者への延命治療に疑問を感じ、延命よりも家族や親しい人に看取られ、人間らしい最後で逝くほうが人間の尊厳が保たれ、美しい最後なのではという作者の思いから作られた小さな施設です。知夫里島は人口の数より牛が多く、コンビニもなければスーパーも無いという、本当に自然しかないというところなんです。作者が何故この場所を「なごみの里」を建てる場所を選んだかという、この島の在宅死亡率でした。知夫里島では、九十パーセント以上の人が病院ではなく家で亡くなっています。作者は「この島には人間らしい生き方がある。」との思いでこの島に「なごみの里」を建てたそうです。

僕はこの本を読んで特に印象に残った話が二つあります。一つは「ありがとう」という言葉についての話です。この本の中に「ありがとうという言葉にはそれまで心の中に抱いていた憎しみや悲しみを消し去り、すべてを許すような力がある」と書いてあります。これを見たとき、そういえば面倒な仕事を押しつけられて、腹が立っていても、その仕事が終わった時「ありがとう」の一言で、今まで怒っていたのが嘘のように気分がすっとして相手を許してしまうこともあるなど思い、「すべてを許す」なんておおげさなと少し思いながらも納得してしまいました。そして、こんなにも身近に、たった一言なのにこんなに素晴らしい言葉があるんだなと思いました。

もう一つは、痴呆についてです。僕は痴呆は辛いもの、苦しいものだと思っていました。しかしこの本では、「痴呆は神さまがくれた贈り物」、「痴呆万歳」と書いてありました。作者は「なごみの里」で痴呆患者と接しながらそう感じたそうです。痴呆患者の

介護は辛いとテレビなどでは言われているのにどうしてそんな風に考えられるのか、と疑問に思った時、ふと僕の曾祖母のことを思い出しました。この本をくれた祖母の母、僕の曾祖母は知夫里島に住んでいました。僕も何度か祖母に連れられ、曾祖母の家へ遊びに行きました。曾祖母は痴呆でした。僕はいつも曾祖母に叔父の名前で呼ばれていました。僕は初めそれが不満でした。そして、痴呆という病気にまだ小さかった僕はどこか怖いと思っていました。しかし、時間の流れがゆるやかに感じる知夫里島の空気、そして何より曾祖母の笑顔で不満や怖いという思いはいつの間にか無くなっていました。この本には「痴呆で色々な事を忘れる代わりにすてきな笑顔を手にする」と書いてあります。曾祖母と、曾祖母の手伝いをしていた祖母、そして僕と笑い合っていると、祖母は介護が辛いという風には見えなかったし、むしろ楽しく時間を過ごしていました。そう考えると「痴呆は神さまの贈り物」というのが妙にうなずけました。

最後に僕はこの本を読んで、痴呆のように見方を変えれば、不幸なことにも実は幸せなことがあるように、自分は不幸だと言う前に他の方向を見て幸せを見つけられる、というような生き方ができればと思います。

## 「自殺って言えなかった。」

建築学科1年 香川 恵理子

この本は、自殺によって父や母を亡くした人「自死遺児」の方々が、今苦しんでいる人や自死遺児の人、社会のみなさんに向けて、「自殺」についての自分の思いを綴った作文や、自殺防止活動について記されています。

なぜ、私がこの本を選んだかというと、自殺についてあまり知らなかったからです。今まで、自殺について関わりを持たなかったので、「自分には関係ない。」その一言でこの問題を片付けてきました。なので、あえてこの問題に触れる事で、現実を知り、自分自身が変われたらいいなと思います。

この本に書かれている作文は、真実がそのまま記してあり、事件当時の情景が生々しく伝わってきました。「お父さんは自分で首に掃除機のコードをグルグル巻き、そのコードをドアのノブに引っかけて首を吊って亡くなっただけ。最初に見つけたのは学校から帰ってきた小六の妹と中二の弟で、見つけた時はもう手遅れだった。お父さんの足は紫色になってしまっていて、それを見た妹はお母さんに「紫色の変な人がいる」って言っていたそう。」これ

は作文の一部をぬき出したものです。私はこの作文を読んだ時、恐怖と悲しみに涙が出てきました。今日は、冗談を言って笑っていても、明日はロープで首を吊って死んでいるかもしれない。人の心は時間を刻むごとに変わってしまうのだと、改めて思い知らされた気がしました。

「誰かに見つけてほしくて、誰かに気づいてほしくて、誰かに助けてほしかったのだと思う。そのために父はいろいろなところでサインを送っていた。」この人の父のサインは、死ぬ一カ月前の電話だったそうです。電話の声は弱々しく口にした言葉は「お父さん、もう自殺しなきゃならんのかなあ……。」だったそうです。しかし、その言葉を冗談で返し、まともに受けとめなかったことを今でも後悔していると書いてありました。私も中学生の時、同じ様な体験をしていたことを思い出しました。女の子の友達でした。その子はいつも明るくて、元気な子でした。夏休み前のある日に、一緒に帰っていると彼女がぼそっと、

「もう、死にたい。私は、何のために生まれてきたの？」

と、言ってきました。まさか、「死にたい。」と言われるとは思わなかったし、本人に言われるまで気づかなかった自分に腹が立ったのを今でもはっきり覚えています。その時、私はやっと彼女の出したサインに気づき、相談に乗ってあげました。原因は、勉強の事と交友関係の事でした。いじめにあっていたそうです。彼女がこんなに苦しむ前に助けてあげられなくて、とても申し訳ない気持ちでした。

「大丈夫。私がいるから、いつでもおいで。」

と、その時私にできる事をしたつもりです。彼女は、「ありがとう。」

と言って、ずっと泣いていました。今思えば自殺をした人はいないけど、自殺をしようと苦しんでいる人は、私のまわりにいるんだなあと思った。自分が思っているより、自殺は身近な問題だとつくづく実感しました。

私は、この本を読んで自殺についての考え方が少し変わった気がします。初めは、考えるのも怖く、あまり関心がありませんでしたが、この本を読み終わった今、自殺について理解したいと思うようになりました。今日、年間の自殺者は三万人以上にもなるといわれます。その一人一人が、どんな思いで自殺という道を選んだのか、何が自殺まで追いこんだのか、そういう事を考えられる様になっただけでもすごいと思うし、この本を読んでよかったと思いました。「ずっと生きてほしかった。また、お父さん、お母さんと呼びたい。」という自死遺児のみなさんの気持ちも痛いほど感じる事ができたと思いま

す。

最後に私が思うことは「死」ほどつらい選択はないということです。もし、今私の周りに「死」について苦しんでいる人がいるとしたら、手をさしのべたいと思います。

## 「イツモ。イツマデモ。」

建築学科1年 山本 桃璃

「大切な人の存在が人生という名の旅をもっと自由にする」

結婚したり、子供ができると自分の時間がなくなるとか縛られるという人ばかりだと思っていた。でも、この本を書いた高橋歩という人は違った。妻であるさやかさんが隣で笑ってくれば自分は幸せだと堂々と書いているし、結婚して、子供が出来て、大人になるにつれて楽しく自由になったと書いている。大切な人を大切だと言うのは勇気がいるし、照れもあると思う。だけど、高橋歩はそれを当たり前のように言っている。使われている言葉は難しいものではなくて、単純でストレートなものばかり。でも、その飾らない言葉たちが高橋歩の意志を濃く表現していると思った。まっすぐに分かりやすく伝わるのは、高橋歩という人物の人柄や性格のお陰だと思う。この人は、沢山の夢を持っていて、それを一つずつ実現させてきた。二十歳のとき、自分の店を持ちたい、という夢を見つけた著者は、仲間を集めて借金をしてアメリカンバーを始める。夢を見つければすぐ、大学を辞めて実現するために努力する。この行動力は本当に凄いと思う。結局、二年後店はブレイクして著者は起業家として成功した。しかし、新たな夢を見つけ、あっさりそれを手放す。後悔とか、執着とかないのかなと私なら思うけど、彼にとって大切なのはお金や名声ではない。それが分かりやすく表れていると思う。彼にとって大切なのは、夢であり後の妻である恋人であり新しい仲間なのだ。この後も、彼は夢を見つけてはそれの実現のために全力を尽くし、そうして夢を叶えていくのだ。シンプルで、分かりやすい人生。でも、こんな風に生きられる人はそうはいない。夢のために生きられるって凄いなと思うし、とても素敵だと思う。大抵の人は、一度手に入れた成功を手放すのは嫌だと思う。それが悪いとは思わない。だけど、そうじゃないのは格好良い。自分はそう生きられないだろうから、彼の言葉は私に響いた。

彼がこんなに自信を持った人生を送れるのは、妻であるさやかさんの存在が大きい。常に支えてくれて、信頼してくれる人がいるのは、大きな心の支え

になるだろう。この本の中で、彼は何度もさやかさんに対する尊敬を書いているし、自分にとって彼女がどれほど大切かを書いている。自分の弱いところを見せるのも、苛ついて理不尽な言葉を言うのもすべてさやかさんに対してだけ。そう言えるのは本当に信頼している証拠だと思う。

「互いに死んじまう日まで、思いきり依存しあおうぜ」

という一文があり、その言葉はすごく心に残った。“依存”という言葉には、あまり良いイメージがなかったから余計にインパクトが強かった。“依存”の意味は、他のものに頼って成立する（生きる）こと。何かに頼らなければ成立しない、生きられないというのはどちらかと言えば良いことではないし、ほめることでもない。だけど、どちらかがいなければ生きていられないほど必要としてくれる人と出会えたのは本当に凄いことだと思う。それほど大切な人がいるから、高橋歩はこんなに胸張った人生を送ることが出来ている。自分の決めたことに誇りを持っている。

「なにかを潔く選び、凜として生きたい。正しい、正しくないじゃなく、自分で決めたことが答えだ。決めることで自分の中心が決まり、迷いは消えていく。」

私は、あまり決断力が良い方じゃなくて、なんでも誰かに決めてもらいがちなところがある。だから、自分の意見をしっかり持っている人は尊敬するし、彼のように自分の決断に自信を持つ人は本当に凄いと思う。自分で決めたことこそ答えだ、と言えるようになりたいと思う。

こんな風に、彼の想いは常にまっすぐだ。

「世界中の人の役に立つことをしたい」

彼はそう書いている。だけど、そう出来なくても平気で暮らしている自分がある、とも書いてある。私もそうだ、と思った。戦争や飢餓、災害など様々な理由で苦しんでいる人は多くいて、私はそれを知っている。だけど、何もせず幸せに暮らせている。世界のために自分に何が出来るのかなんて分からない。でも、大切な人達を自分なりに精一杯大切にす。それが、世界平和への近道だ、と彼は言っている。そこから始めたい、と。私もそこから始めようと思う。

「愛も平和も、大声で叫ぶようなものじゃない。静かに淡々と広がり、つながっていくもの。」

大きなことは出来なくても、静かに広がる愛や平和を感じて生きたい。高橋歩という人間のように、小細工ぬきでまっすぐに人と関わって生きたいと思えた。

## エッセイの部

最優秀賞

### 私と筆

電子制御工学科1年 伊藤 夏織

私は、書道をしている。

毎週土曜日の午後から習字の先生の家に行って“長興”という雑誌に出す作品を書いている。

私が習字を始めたのは小学校三年生の時。当時私と仲の良かった友達が習字をやっていたから、という随分単純な理由だった。

最初の文字は“一”だった。慣れない筆持ち、左の朱色で先生の書いたお手本を見ながら、色々な想いの入り交じったドキドキ感を胸に、字を書いた。書き終わると溜め息が出た。先生に悪い所を教えてもらい、また書いた。“一”なんて横棒一本だから簡単だと思っていたけど、太さとか角度とか、始めと終わりが団子になっちゃいけないとか案外難しかった。真っ白い半紙が真っ黒い半紙に何枚もなったころようやく“一”が書けた。心に何ともいえない充実感と達成感が広がった。素直に「楽しい!もっとやりたい!!」と思った。これが私と書道の出会いだった。

次は“三”を書いて、その次に“たこ”や“かに”などの二文字を書いて次は“ことり”などの三文字、そして四文字、漢字を書いて、五文字になって、楷書から行書を書くようになった頃には私の中で習字はとて大きなものになっていった。中学校三年生の時、私は中学生の部の中で七段だった。この七段の上の優秀生になるには試験のようなものを受けなくてははいけなかったので私は九月にその試験を受けた。課題は行書で“白川郷合掌造。”初めての六文字で書けるのか本当に不安だった。“郷”の字で格好がとりにくくかなり苦労した。何度も何回も嫌になったしやめたくなった。書けなくて憂鬱にもなった。そんな私を支えてくれたのは先生だった。私をずっと励ましてくれて、「ここをもう少しこうしたら。」とアドバイスをくれて、習字の時間が終わっても嫌な顔せず一緒にやってくれて、先生がいたからこそ、この“白川郷合掌造。”を書くことが出来たのだと思う。名前的一本一本まで丁寧に集中して書いた。例え受からなくても悔いの残らない私にとって最高の作品が書けた。

十一月、私がいつものように習字に行くと私の机



の上に私の書いた“白川郷合掌造”白い細長い封筒が置いてあった。封筒には「優秀生推挙記念」と書かれていた。すごく嬉しかった。「やったあ!」と言うと先生も「おめでとう。」と言い一緒に喜んでくれた。嬉し涙が出そうだった。封筒を開けると中にまたしても細長いきれいな濃青の箱が入っていて筆が入っていた。その日からその筆は私の宝物になった。

今、私は高校生になり先生のお手本なしで字を書いている。手本がないのは、はっきり言って難しい。でも自分で考え工夫して書き、先生の真似ではなく“自分の字”を作っていくことが大切なんだと気付いた。これから私は習字(習う字)ではなく書道(自分の字)を極めていきたいと思う。

## 優秀賞

### その周りを

電気情報工学科1年 造田 美咲

私には最近、とても気になっていることがある。その気になっていることは、私と同じくらいの年齢の人が殺人を犯すという事件が増えてきている、ということだ。昔はこんな事件、めったに耳にしなかった。しかし最近は、「またか」と思うほどよく耳にするようになった。一体、なぜこんなにもこんな事件が起こるようになったのだろうか。理由なんか、考えればきりが無いほどでてくると思う。今回は、私が考えた二つについて書きたいと思う。

まず一つ目は、彼らが人殺しをゲーム感覚でやっけてしまっているということ。ゲームの世界と現実の世界の区別がついていないのだろう。最近では本当にいろんなゲームがある。RPGや格闘ゲーム、様々な敵をたおしていくゲームなど種類は本当にたくさんある。私はべつにゲームが悪いと言っているわけではない。ただ、ゲームの世界と現実の世界がわからなくなってしまうのは問題だと思う。例えば、RPGの勇者になったつもりで、格闘ゲームのつもりで、敵をどんどんたおしていくつもりで…。そんな『つもり』で人が殺されては、本当に話にならない。今後、私たちはゲームとの関わりについても、考えていかなければならないと思う。

次に、二つ目に私が考えたのは、彼らは人を殺すことが大罪だということがわかっていないということ。だから簡単に人を殺してしまうのだ。しかしこの場合、悪いのは彼らだけではないと私は思う。なぜなら、こういうことを教える責任は『大人』にあると思うからだ。『大人』と言っても、こういうことを教えてくれるのは、きっと親だろう。誰にとって

も親という存在は、とても身近なものなのだから。その親にもいくつか種類があって、子どもに対しきちんとして、ほどよく甘やかしてくれる親もいれば、バカみたいにしかりつける親や、バカみたいに甘やかす親、それに子どもに対し無関心な親もいるだろう。ニュースなど見ていると、犯罪を犯している人の親は、後者三つのような親が多いと思う。このような親に育てられた子どもは、愛情を受けずに育つ。愛情を受ければ受けるだけ、命の大切さを知ることができると思う。だから、愛情を受けずに育った子どもは、命の大切さを知ることなく育ってしまうことになるのだ。そうすると『大人』の役目がいかに重大なものかというのがわかる。大人が子どもに対し、たくさん愛情をそそいでくれば、子どもは『生』を感じ、命の大切さを知ることができる。だから『大人』は、子どもにもっと愛情をそそぐべきだと、私は思う。

増加し続ける少年犯罪。しかし悪いのは、犯罪を犯している彼らだけではないのだ。もっと、彼らの周りの環境に目を向けてほしい。そうすれば、彼らがなぜそんなことをしたかすぐにわかると思う。そして、そうすることは、増え続ける少年犯罪に歯止めをかけることにつながると思う。

### 理想のレシピ～勉強編～

電子制御工学科1年 関本 美咲

今年、高専に入学して、今までの五倍はあるだろうと思われる宿題や予習・復習の数々。今まで、テスト一週間前からしか勉強していなかった私は、高専に入った途端その生活をやめ、なるべく予習・復習をするよう努力している。しかし、勉強というのは、周りの環境によって左右されるものだと思う。そこで、私にとっての理想的な勉強環境を考えてみた。百ほどあるものから三つだけに絞り込んだ。つまりこうだ。

まず、晴れた日には近くの河川敷、もしくは広い芝生で、とても静かな雰囲気の中、ゆっくりと勉強してみたい。疲れたら、その場で昼寝ができるので、便利である。時間帯は、二時頃などは暑くて干からびてしまうので、四時半～五時頃に出かけ、新聞などで調べた日の入り時刻三十分前に帰宅するのが効果的(季節によって異なる)。ただし、虫よけと、日焼け対策は万全にするべきである。私の近所には多分河川敷などはないが、今年の夏休みに、一人で水鳥公園へ行って、河川敷風な所の石段に腰をかけて二時間ほど勉強した。確かに集中はできたが、石段が硬くて座り心地があまりよしくなかった。だ

から、いつか河川敷か芝生に行って勉強したい。

次に、部屋の中。自分の机の真正面に適度な大きさの窓があること。例えば冬の夜、しんと積もる雪を時々眺めながら、また夏の夜、カエルの合唱を鑑賞しながら勉強できたら最高だ。もっと贅沢を言えば、窓の外に映る景色は、山や川があり、私の好きな向日葵が咲いていればありがたい。もしそうであれば、机に向かうのが楽しみになり、絶えず部屋を綺麗にしていきたいと思いますようになるかもしれない。そうなれば勉強するのが好きになることは間違いないと思う。

そして最後に欠かせない条件は、飲食物である。それは、やる気を起こさせるために必要なことの一つだからだ。夏は氷が入って、カランカランという音がする冷たいお茶。もちろん机上が濡れるのを防ぐためにコースターは不可欠。そして冬にはあたたかいお茶。食べ物は、ご飯が食べられなくなるクッキーのようなものはなるべく避ける。そして何よりも両手がふさがって勉強がストップしてしまうアイスクリームのようなものではなく、なめるだけで、勉強に何の妨げのないキャンディーが望ましいと思う。ただし、虫歯や糖尿病の危険性もあるため、食べすぎにはご用心。これで勉強ははかどり、一層楽しみが増すことだろう。

以上で私の理想的な勉強環境を挙げるのを終わりにしておく。多分、というより必ず、私の心理状況は変化し、これから様々な理想が更新されていくからである。更新された時にはまたこのように文章にしてみようと思う。

## 佳作

### 一人の大切さ

建築学科1年 住友 美香

朝、朝食を食べようとリビングへ行き、いつものように『めざましテレビ』を見てみると、その痛ましいニュースは流れた…。

「その痛ましいニュース」とは、毎日必ずニュースで流れると言っていいほど全国各地で起こっている殺害事件のことである。

最近の事件で最も印象的だったのが、秋田県の小学生、米山豪憲君と畠山彩香さんを殺害した畠山鈴香容疑者の事件である。結局、今は逮捕されているが、私がこの事件で最も信じられないと思ったことは、事件が起きた最初のころは、畠山鈴香容疑者自らが被害者を装っていたことだ。しかも、今は自ら自供しておきながらまた容疑を否認している

というので、ニュースを見ていて本当にびっくりした、というよりは唖然とした。今回は、すぐく身近にいた顔見知りによる犯行だったので、今まで近所付き合いをしていた米山豪憲君の家族の方々も、言葉では言い表せないほどの悔しさでいっぱいだったと思う。最近、毎日恒例というほどこの事件は色々な番組で取り上げられている。私は毎日のようにこの事件が報道されている番組をチェックしていた。そしたら、色々と不可解な点がこの事件にはたくさんあることが分かった。それは、畠山鈴香容疑者は、娘の畠山彩香さんを自ら殺害しているにもかかわらず、自ら彩香さんの捜索願いのポスターを作ったり、取り調べの時も、実際起こっていることと違う、矛盾した発言などをしてきたことだ。なぜ、このような行動を平気でとれるのか、また、自ら起こしている事件にもかかわらず、平然としている様子は、視聴者としてテレビを見ていた側の私もすごいこわかった。娘を殺害するということは絶対あってはならないということはもちろんのこと、なぜ近所の子どもの命までもを奪う必要があったのか、この事件のニュースを見るたびに疑問に思う。このような事件は二度と起きてほしくないし、私もこの事件のことは、これから先も忘れることはないと思う。

本当に近年、このような殺害事件が日本では増えつつあるというのが現実である。今まで私はそういったことについて深く考えたことはなかったが、今よくよく考えてみると、このままこのような事件が年々増えつつけてしまったらどうなってしまうのだろう、とか考えるだけでも恐ろしい。

今となっては、大人による犯行だけでなく、子どもによる犯行も増えている。私と同年の人とかそれに近い年齢の人とかが殺害事件を起こしてニュースとかで出ているのを見ると思わずゾッとする。中学生、高校生とかだけでなく、今では小学生までもがこういった殺害事件を起こしているのをニュースで見たことがある。なぜ、子どもまでがこのようなすさまじい事件を起こすようになったのか、なぜ、絶対身につけてはならない知識を身につけてしまったのか、どこでそんな知識を身につけてしまったのか、本当に不思議でたまらない。

「前から恨みがあった」、「気に入らなかった」、「腹が立った」など、そんな小さな理由で簡単に人の命は奪われてもいいのだろうか。人の命を奪わないと解決できないことだったのか。後で、「そんなことをするつもりはなかった」みたいなことを言っても、取りかえしのつかないことになってしまってからでは遅すぎるだろう。後で後悔するのならなぜこんな事件を起こしてしまうのか。やっではないけないことだって分かっているのになぜ犯行に及んでしまうの

か。私には理由が全く分からないし、むしろ分かりたくないと思う。

最近の人々は、命を軽く見過ぎているのではないか。人一人いなくなるということは、大げさに言うと、日本の人口が一人減るということである。そう考えると、このような事件によって、一日に何人のペースで日本の人口は減少しているのだろう。年間にすると莫大な数になってしまうのだろう。人一人というのは一見少ないもののように見えがちだが、その人一人の命が奪われたことにより、残された遺族、友達など多くの人々に悲しみを与えることになる。でも一番悲しいのは、命を奪われた本人だと思う。その人はもしかしたら、やりたい事もたくさんあったかもしれないし、夢に向かって一生懸命何かに取り組んでいる最中だったのかもしれない。それなのにある日突然身勝手な人の犯行により、その人の夢や希望までも失われることになる。

今の日本は、いづどこで何が起きてもおかしくないぐらい多くの事件が出回っている。まるで、敵を倒してクリアしていくゲームのような状況に日本は近づきつつあると思う。なので、いづどこで危険な目にあってもおかしくはないということである。今まで、何一つ危険な目にあわず生きてきた私は幸せだと思って、一日一日を大切に生きていたいと思う。

## 尊 敬

建築学科1年 萩原 由也

私が尊敬する人はたくさんいる。いや、正確に言えば、尊敬する瞬間はたくさんあると言った方が正しいのかもしれない。

とは言いつつ、よくよく考えてみると尊敬するとはどんな事を指すのかハッキリとは分からない。だから私のそれが、果たして本当に尊敬していることを言うのかは正直分からない。でも他に言葉が見つからないので、取りあえずここでは尊敬していると言うことにしておこう。

私が最も尊敬している人、それは両親だ。何か困って相談すると、必ず力になってくれる。何かを壊して相談すると直してくれる。当たり前の事かもしれない。常識的な事だから誰でも知っている事なのかもしれない。でも、何が起きててもどんな難関でも両親は必ず解決してくれる。それって凄い事だ。小さい頃からそう思っていた。何故だか分からないけど両親は誰の目にも大きく見えると思う。私は両親に感謝しているし、両親のような大人になりたいと思う。尊敬している。

私が尊敬している人、友達。親への尊敬とはま

た違って、友達には尊敬する部分がたくさんある。

学校でできる友達って本当に特別だと思う。たくさん話をし、たくさん一緒に居ると、互いの事が分かってくる。そして「こんな風に考えてるんだ」「こんな風になりたい」という驚き・発見の瞬間が来る。それが私の尊敬する時の合図だ。友達と居ると、本当に色々な事が学べる。友達は皆先生であり尊敬する部分を持っている。

私の尊敬する人、プロ。何のプロだろうとスペシャリストって凄い、と思う。例えば、プロの建築家。私は建築関係の仕事がしたくて高専に入り学んでいる。だからその夢に到達している人って特に凄いなあって気持ちになる。尊敬するなあと思う。しかし、その表現は、間違っているのかもしれない。何かを成し得た人って凄い。でも、私が本当に尊敬するのは、結果がどうであれ、自分の夢に向かって、苦勞して、努力している人なのだ。強い意志を持ち生きていく人って凄い。当たり前で、でもそれができている人は実際少なく。でも当たり前で誰かができないといけない事。言葉では説明しづらい「自分の意志・夢を持ち生きること」ができる人を私は心から尊敬する。

こうして考えてみると、私が尊敬する人とは、私が持っていないものを持っている人を指している。私が欲しいと思うものを持っている人を指している。だから限りなく尊敬する人が出てくるのだ。ただ知らないだけで、「尊敬する」と言う部分を見つけてないだけで、本当は全ての人が私の尊敬に値する人なのだ。

私のこの考えを知って、「じゃあ犯罪者も尊敬するのか？ 幼児虐待する様な人を尊敬するのか」「自分が持っていないもの・欲しいものを持つ人を尊敬すると言っているが聞こえはいいだけで、ただ欲深いだけだ」「きれいな言を言ってるだけだ」などと思う人がいるかもしれない。むしろそんな声の方が多いかもかもしれない。

私自身、自分の考えを、そんな風に思う。矛盾しているが、尊敬する人達について述べた事は事実で、それについてこの様に思っていることも事実なのだ。

皆それぞれ考え方は違う。私にとって尊敬するというのはどういった事なのか、最初に述べた様にハッキリ分からない。だからこんな矛盾した答えが出たのかもしれない。今の私にとっては、「凄い。自分もこんな風に」と思わせる人が尊敬する人だ。

だから、私の尊敬する人は、両親であり友達であり、全ての人々であるのだ。もしもこの先、考え方が変わっても、今の私の考えはこうなのだから、こうなのだ。

## 図書委員会活動報告

### 平成18年度高専祭 古本市を開催して

図書委員長 電気工学科4年 高橋 裕也

僕たち図書委員会は去年に引き続き高専祭で「古本市」を開催しました。今年は去年と比べて値段を下げ、冊数も大幅に増量しました（特に漫画）。古本は先生方や某図書館から譲って頂きました。頂いた本を作者別に分け、値段をつけて販売しました。あと、出来るだけ購入希望者が多く本を買えるようにと「BOOK パイキング」という企画をやりました。小さな袋（10円袋）か、大きな袋（50円袋）に好きなだけ本を入れて買っていいというのですが、これは高専祭の当日に思いついた案だったので、宣伝が上手く出来なかったりしてトラブルが絶えませんでした。この体験からいきなり何かをやるうとしても駄目で、地道な下準備が大切だということがわかりました。最終的には、図書委員の熱意が伝わったのか値段

の割には売り上げを多く上げることができました。最後に、お力添えを頂いた全ての皆様にご場を借りてお礼を申し上げます。

古本市での売り上げで、学生図書委員会では次の図書を購入しました。すべて米子高専図書館に寄贈しています。ぜひご覧ください。

（購入図書）

「涼宮ハルヒの憂鬱 谷川 流 角川書店」「涼宮ハルヒの溜息 谷川 流 角川書店」「四季 春 Green Spring 森 博嗣 講談社」「四季 夏 Red Summer 森 博嗣 講談社」「四季 秋 White Autumn 森 博嗣 講談社」「四季 冬 Black Winter 森 博嗣 講談社」「涙そうそう（幻冬舎文庫）吉田 紀子 幻冬舎」「灼眼のシャナ 13 高橋 弥七郎」「夏のレプリカ 森 博嗣 講談社」「手紙（文春文庫）東野圭吾 文藝春秋」「姉ちゃんの詩集 サマー 講談社」「幸福な食卓 瀬尾 まいこ 講談社」

### 図書館の思い出

物質工学科5年 生田 寛子

どうして入ったのか、を実は覚えていない。

それでもズルズルと5年間やって、委員長までしました。

率直な話、もっと静かでつまらない委員会だと思ったのに、フタを開ければ結構活発で楽しい。ブックハンティ

ングや文化発表会、はたまた高専祭まで参加する。そんな委員会に入れて良かったと思う、片手分。

先輩や後輩にいっぱい迷惑かけました、私。それでも見捨てずにいてくれて、ありがとう。

ワガママもいっぱい言いました。聞いてくださった先生方、司書さん、本当にありがとうございました。

## 平成18年度 米子高専文化セミナー報告 (第2回～第4回)

平成18年度の米子高専文化セミナーは、第2回が6月17日、第3回が10月28日、第4回が11月25日の、いずれも土曜日に、米子市公会堂中ホールにて開催されました。

第2回は、一般科目（英語）の中島美智子先生による「ネイチャーライティングの世界」と題したセミナーが行われ、また第3回は機械工学科の河添久美先生による「しのび寄る破壊 ～金属疲労のおはなし～」のセミナーが行われました。第4回は、建築学科の西川

賢治先生による「イメージジェネレーターの展開 ～造形能力の補強手段として～」と題したセミナーが行われ、いずれも多くの方が来場されました。

文化セミナーを通じて、米子高専が地域へと貢献することができると考えています。来年度もぜひご来場ください。

（米子高専文化セミナーは、その内容をビデオに撮影して、DVDで保存しております。貸し出しも行っておりますので、御活用ください。）

## 文献情報検索システム JDream II を使おう

JDream IIとは科学技術や医学などに関する文献を手軽に検索できるシステムです。学術基礎研究を推進している大学・国立試験研究機関、高等専門学校や専門学校等の教育機関向けに科学技術振興機構が作成したもので、科学技術に関する約12,000種に及ぶ逐次刊行物、技術レポート、会議資料、公共資料、予稿集な

どに関する情報を国内はもとより世界中から網羅的に収集してあります。ぜひ卒業研究などに御活用ください。

### （JDream IIの利用方法）

JDream IIは、本校図書館情報センターのホームページから利用できます。まずは、「論文検索・電子ジャーナル」のJDream II接続口にアクセスしてください。次にユーザ名に「米子高専」と記入し、[アクセス] ボタンをクリックするだけで利用可能です。